

# 文章におけるコピュラ文の機能

—「おすすめのなのはワインです」と「おすすめのなのがワインです」—

栗原 さ よ 子

〔キーワード：①述語名詞句の意味範疇 ②関連語句 ③提題表現〕

## 0. はじめに

コピュラ文とは、以下の形式の文をいう。

- (1) a 《主語名詞句》ハ《述語名詞句》ダ。
- b 《主語名詞句》ガ《述語名詞句》ダ。

コピュラ文は、「主語名詞句と述語名詞句を「繫辞」（コピュラ）と呼ばれる特殊な動詞「である」「だ」で結びつけたもの」（西山（2003: 119））である。コピュラ文の意味には、少なくとも、ある対象の属性を述べるタイプの「指定文」とある要素を選び出し指定するタイプの「指定文」が知られている。

- (2) a 太郎は学生だ。・・・〔指定文〕
- b 幹事は私だ。・・・〔指定文〕
- c 私が幹事だ。・・・〔指定文〕

本稿は、以下のような文脈で最も典型的に現れるコピュラ文「A は B だ」と「A が B だ」の文をとりあげる。(3) B は、(2) b と同じ「指定文」である。(4) は、諸説あり、指定文かそうでないか議論の分かれるところであるが<sup>1)</sup>、(6) のように文章・談話において互換性が高いという特徴がある。

- (3) A：この店では、どのお酒がおすすめですか。
- B：当店でおすすめのなのはワインです。（「A は B だ」）

- (4) 様々な種類のお酒をご用意していますが、当店でおすすめのなのがワインです。

〔A が B だ〕 ワインは常に 300 種類以上貯蔵しており、料理に合うワインを専門のソムリエが選んでいます。

「A は B だ」は対話における質問の答えに用いることができるが、「A が B だ」は用いにくく、ある話者の連続する文・発話で用いられやすい。

(5) A：この店では、どのお酒がおすすめですか。

B：？当店でおすすめなのがワインです。

(4) のような、ある話者の連続する文・発話では、「A は B だ」と「A が B だ」はその多くが置き換えても不自然にならない（互換性が高い）。

(6) 様々な種類のお酒をご用意していますが、当店でおすすめなのが／はワインです。  
ワインは常に 300 種類以上貯蔵しており、料理に合うワインを専門のソムリエが選んでいます。

近年、コピュラ文の文意味については、研究成果が蓄積されてきている（三上（1953）、上林（1988）、西山（1985）（1990）（2000）（2003）、砂川（1996）（2005）、新屋（1994）、熊本（1989）（1995）（2000）、坂原（1990）、天野（1995））。一方、コピュラ文の文章・談話における機能といった談話レベルの研究は、まだそれほど多くはない。そのうち、砂川（1996）（2005）は、コピュラ文及び分裂文（分裂文は統語的にコピュラ文の一部とみなされている（西山（2003: 135ff.））の談話機能について分析を行っている。砂川（2005）では、「指定文」（砂川（2005）では「同定文」。「A が B だ」も指定文とする）の談話における機能は、「後項焦点文」（A は B だ）、「前項焦点文」（B が A だ）、「全体焦点文」（A が B だ）の三つのタイプの情報構造の違いによって使い分けられ、それが「語順の原理」に基づいていることを主張している。

本稿では、(3)、(4) のような「A は B だ」と「A が B だ」のコピュラ文の情報構造について、実例に基づき検証すると共に、「A は B だ」と「A が B だ」のコピュラ文が文章の展開にどのように関わっているのか（文章における機能）を分析・考察する。その際、様々な様相を体系化して捉えるために、述語名詞句「B」を意味範疇によって分類し、後続文での「B」の関連語句の現れ方の相関関係を観察する方法をとる。(3) B の「A は B だ」に置き換えられる「B が A だ」（「ワインがおすすめ（のお酒）です」）も同時にとりあげた方がよいのであるが、本稿では、分析結果から情報構造上、類似した 2 形式のみをとりあげ、「B が A だ」は、今後の分析課題としたい。

本稿の構成であるが、1 章では、データと分析方法について説明を行い、2 章では、

分析の着眼点である述語名詞句「B」の意味範疇による分類を行う。3章では、分類したコピュラ文の述語名詞句の関連語句がどのような語句で、どのような文法形式によって後続文に現れるかを調べ、コピュラ文の機能について分析・記述する。4章では、分析から得られた結果のまとめを行う。

結論を先取りすると、次のようである。「AはBだ」、「AがBだ」共に主語名詞句「A」で、旧情報に新情報を加えた情報となる傾向がみられ、先行文とのつながりを保ちつつ、新たな要素を付け加えている。述語名詞句「B」は、先行文に未出の情報を担っており<sup>2)</sup>、後続文で何らかの形式によって現れる傾向にある。このことから、本稿がとりあげる「AはBだ」・「AがBだ」の文章における機能は、大きく括れば、後続文に関連する何らかの要素を何らかの意味で「提示する」ことであると予測される。そして、後続文に現れる「何らかの形式」は、述語名詞句の意味範疇（例えば、数量を表わす名詞か、固有名詞かといった）によって性質が異なる傾向のあることが分かった。それに相関して文章におけるコピュラ文の機能も「提示する」という共通項を持ちながらも異なっている。

「AがBだ」は、「AはBだ」に比較すると、述語名詞句の意味範疇における出現範囲が限られているため、提示のあり方においても限られた振る舞いをみせている。

## 1. データと分析方法

### 1.1 データ

データとしては、比較的文章が短い新聞のコラムを用いた。先行文・後続文との関係が見えやすいからである。新聞のコラムは、執筆者による表現の偏りを少しでもなくするため、同期間の3種類のコラム「天声人語」、「余禄」、「編集手帳」を用いた。期間は、それぞれ2006年7～9月であるが、「AがBだ」の用例を追加するため、「天声人語」のみ2000年1～4月からも収集した。出現したコピュラ文のデータ数は、「AはBだ」が55例、「AがBだ」が15例、合計70例である。

出現率は、「AはBだ」の方が「AがBだ」より4倍近く多い。筆者が過去に検索した他のジャンルでも、一般に「AはBだ」の方が出現率がかなり高いので、この用例数の差は、ジャンルによるものではないであろう。「AがBだ」が15例とかなり少ないが、分析結果として、だいたいの傾向はつかめるものと判断される。

### 1.2 分析方法

分析は、佐久間まゆみ・杉戸清樹・半澤幹一他（1990）（以下、「佐久間まゆみ他（1990）」と略記する）及び佐久間まゆみ他（1997）の「反復表現」・「くりかえし」、「提題表現」・「とりあげる」、「省略表現」・「はぶく」を中心とする分析法を用いた。

「関連語句」、「反復表現」、「省略表現」、「提題表現」等の用語は、上記の文献による。

以下に、用語の規定を示す。

「関連語句」：「もとの語句と類似の意味を持つという関係にある語句を「関連語句」という。」(佐久間まゆみ他 (1990: 47))。ここでは、「同一語句」(相互に同じ表現形式をもつ語句) も含める。

「反復表現」：ある文章の中で「同一語句」や「関連語句」が繰り返される場合、「同一語句の反復表現」、「関連語句の反復表現」という。

「省略表現」：「ある語句の反復を避けたり、言わなくてもわかることを表現せずにすませたりして、文中の要素のいずれかが欠落している表現を、「省略表現」と呼ぶ」(佐久間まゆみ他 (1990: 54))

「提題表現」：「文章や談話には、主としてどのような事柄について表現するのかが示す部分がある。構文論では、係り(・提題)助詞の「ハ」を伴う名詞句を「文の主題」というが、ここでは、文章や段落の話題を示す、より広い表現形式を一括して「提題表現」と」(佐久間まゆみ他 (1990: 59)) いう。

「指示表現」：「指示表現は、(中略) そのひとまとまり全体で指示語と同じように文章・談話や場面の中の他の部分を指し示すものである」(佐久間まゆみ他 (1990: 35))。

## 2. 述語名詞句「B」の意味範疇によるコンピュータ文の分類

「A は B だ」・「A が B だ」を述語名詞句「B」の意味的範疇によって表 1 のように五つに分類する。この分類が、概ね「A は B だ」と「A が B だ」に共通して談話機能に相関しているとみられるからである。例文 (1)、(2) から分かるように、述語名詞句「B」は、ほとんどの場合先行文に未出の情報を担っている。

- ① トキは、「2006 年 11 月 24 日」のような具体的日付のほか、「～年前」、「～年前の秋」、「～する途中」など、様々な表現がある。トコロは、通常デグで表わされるが、本稿では「～でだ (った)」は用例に含めなかった。しかし「～でのこと

表 1 述語名詞句「B」の意味範疇の分類と用例数

	意味範疇	「A は B だ」 用例数	「A が B だ」 用例数	合計
①	トキ・トコロ	18	1	19
②	数量	4	0	4
③	補文 (コト節)	4	0	4
④	固有名詞	16	5	21
⑤	普通名詞	13	9	22
	合計	55	15	70

だ(った)」は、本稿のコピュラ文の規定に合致するので用例に含めた。

- ② 数量は、量を表わす数値を含むもので、助数詞を伴う。助数詞は「%」、「トン」、「隻」がみられた。
- ③ 補文述語は、「～ことだ(った)」の形式である。ある具体的な対象ではなく、出来事や概念を文相当で表わし、それを名詞化した形である。
- ④ 固有名詞は、人名、国名、組織名、地名、本のタイトルなどである。
- ⑤ 普通名詞は、単一の名詞から様々な形で連体修飾を伴うものまで含めている。普通名詞の意味的な性質は様々であり、連体修飾成分が文章における機能に関連しているため、この分類に関しては、今後検討の余地があろう。

### 3. コピュラ文「A は B だ」・「A が B だ」の述語名詞句「B」の後続文での現れ方と文章における機能

表1で分類した述語名詞句「B」の意味範疇ごとに、「B」が後続文でどのような形式で現れ、どのように機能しているのかを関連語句、提題表現、省略表現によって分析する。以下、省略表現は(△\_\_\_\_\_)によって表わす。

#### 3.1 トキ・トコロを表わす述語名詞句のコピュラ文

トキ・トコロを表わす名詞句は、(7) b のように通常の語順にした場合、副詞成分で表わすことのできるような名詞句である。

- (7) a CD が商品化されたのは 1982 年だ。
- b 1982 年に CD が商品化された。

このようなトキ・トコロを表わす述語名詞句の「A は／が B だ」の後続文は、時間軸に沿って語られることが多い。時間的な場面設定を行う機能をもっているといえよう。

- (8) 手のひら大の円盤に、クラシックの大曲がそっくり収まる。その使い勝手のよさと、鮮明なデジタル音に初めて触れた感動は忘れない。CD が商品化されたのは 1982 年だ。共同開発したソニー、フィリップス両社間で最後まで、器の大きさの議論があった。(中略) 発売 4 年目で、従来のレコードと売上比率が逆転した。製作コストが下がったおかげで、珍しい曲の初録音や個性的なアーティストのアルバムが多く出回り、音楽ファンを喜ばせた。(余禄 2006. 8. 28/用例番号 1)

この例では、コピュラ文の後、文末がタ形となっており、1982 年当時を振り返って過去のことを語り始めている。時間軸に沿って商品化された CD についての話題が文の数

で7文続く。

- (9) 1993年のU17(17歳以下)世界ユース選手権に出場してベスト8入りしたのが16歳のときだった。それから02年の日韓W杯をはさんだ13年間、中田選手は日本サッカーのかつてない盛り上がりけん引する役割を果たすことになる。(余禄 2006. 7. 6/用例番号 56)

「AがBだ」の例は1例のみであった。この例でも、後続文で語られる長さは比較的短い、時間軸に沿って「中田選手」の活躍が語られている。

「AはBだ」については、文章冒頭の文が4例あり、それらは主語名詞句と述語名詞句の表わす内容全体でもって、トキ・トコロを含む場面の導入機能を果たしているとみられる。

- (10) 昭和天皇が北陸を巡幸されたのは、終戦の翌々年である。第一夜の夕食に出た鰻をきれいに召し上がった。翌日の新聞に「お好きらしい」と記事が載る。行く所、行く所に鰻が待っていた。「きょうも鰻だったね」。笑って話されたと、侍従の入江相政さんが随筆に書いている。(編集手帳 2006. 7. 21/用例番号 11)

### 3.2 数量を表わす述語名詞句のコピュラ文

このタイプのコピュラ文は「AはBだ」のみに見られた。述語名詞句で具体的数値が提示される。その数値に関わって後続文で話題が展開するが、その話題は長く続かず、文章全体から見て大きなまとまりに関わるものではない。また、「数値に関わる」関連語句は現れるものの、「数値」そのものをとりあげる例はなかった。

- (11) 金融庁は少額・短期の融資について、現行の出資法の上限金利を軸に特例金利を認める考えだという。その軸となる年利は29.2%だ。(△その軸となる年利が29.2%であることが)「自然に反する」かどうか、あの哲人に聞いてみたい気がする。(天声人語 2006. 8. 25/用例番号 20)

コピュラ文の直後の後続文は、省略表現を含んでいる。省略表現は、「29.2%が」ではなく、「その軸となる年利が29.2%であることが」と捉えるのが自然である。「29.2%」という数量それ自体が自然に反するかどうかを問うことは文脈上意味がおかしい。その意味で「数値」そのものをとりあげる例ではない。

上例のような数量の取り上げられ方の他、数値というより、実体を前提として提示される数量もある。(12) では、当該コピュラ文では数量の意味で「8 隻」が提示されているが、後続文では、その 8 隻が個の対象としてそれぞれ語られており、結果として読み手は、「8 隻」が単に量的な「8 隻」ではなく、「どの」、「どんな」8 隻かということを知ることになる。

(12) 88 年に廃止された青函連絡船で、最後まで就航していたのは 8 隻だった。

青森に係留されているのは、そのうちの八甲田丸だ。(中略)

津軽海峡を挟んだ函館港には、摩周丸が浮かんでいる。(中略) ほかでは羊蹄丸が東京の「船の科学館」に、大雪丸が、長崎港に係留されている。(中略)

羊蹄丸の元航海士で、連絡船のその後を調べている川村修さん (48) によると、残る 4 隻は海外に売られ、数奇な運命をたどったという。石狩丸と空知丸はギリシャの船会社の所有になり、エーゲ海やアドリア海でフェリーとして活躍した。(中略)

フィリピンでカジノホテルとして利用されていた十和田丸と、インドネシアに売られた檜山丸は、もう自力では動くことができないそうだ。(後略) (天声人語 2006. 7. 16/用例番号 22)

いずれの場合も、数値そのものが後続文に置いて話題の対象として取り上げられているわけではなく、その点、①のトキ・トコロを表す述語名詞句がトキ・トコロそれ自体を対象としてとりあげられないことと共通している。

### 3.3 補文述語名詞句のコピュラ文

補文が述語名詞句の文も「A は B だ」にのみ見られた。後続文との関わり方としては、関連語句として、「～など (が)」の形式で繰り返す場合 (13) と、補文内容を更に詳しく述べる場合 (14)、さらには先行文と並列的な別の事柄を提示することで、先行文とのまとまりをもつ場合 (15) がみられた。

(13) 国民ばかりか中国・韓国はじめ世界が注視する参拝である。奇妙なのは、そこでお参拝を「心の問題」「人間・小泉純一郎の参拝」と私事のように話していることだ。これほど大きな政治的影響を及ぼす行動を私事と言いつくろうことなど、そもそも政治家に許されるだろうか。(余録 2006. 8. 16/用例番号 23)

「そこでお参拝を・・・話していることだ」は、すぐ後に続く文の「これほど大きな政治的影響を及ぼす行動を私事と言いつくろうこと」と内容的にはほぼ同じ事を表わし

ている。後続文の方が「これほど」、「言いつくろう」によって筆者の主観的評価が加わっている点で、単なる繰り返しとは異なっている。

- (14) ただ牽牛と織女が天帝に引き離され、年に1度カササギの作る橋を渡って会う物語は中国や日本とそう変わらない。

ちょっと違うのはその時期に雨が多いせいか、2人が流す涙と雨とが結びつけられることだ。夕方の雨は2人が会えた喜びの涙で、次の夜明けに降る雨は別れの悲しみのあまりながす涙だという。そればかりか離れ離れにされた2人の涙が、地上で洪水を起こすという物語もあるという。(余禄 2006. 7. 7/用例番号 24)

「AはBだ」の「B」に含まれる語「雨」「涙」について、「夕方の雨」、「夜明けに降る雨」、「2人が会えた喜びの涙」、「別れの悲しみのあまり流す涙」の表現が示しているように、「2人が流す涙と雨」の結びつきをより詳しく具体的に語っている。

- (15) この作品で印象的なシーンの一つは、列島沈没への政府対策の検討の中で「何もしない」という案が出る場面だ。ちょっと驚いたのは、本紙のアンケート企画「日本のスイッチ」でも「日本沈没が本当に起こったら」との問いに「海外に逃げる」という回答がわずか27%にとどまったことだ。まさか「一億二千万玉砕」でいいというわけではあるまいが、さて日本人は案外変わっていないのか、まったく変わったのか。(余禄 2006. 7. 25/用例番号 25)

この例では、直前の文の述語「列島沈没への政府対策の検討の中で「何もしない」という案が出る場面」と当該コピュラ文の述語とを並列的に提示して、それらの内容を「一億二千万玉砕」の意味につなげ、その結果として生じる疑問、「日本人は案外変わっていないのか、まったく変わったのか」という問いを後続文で投げかけている。先行文とセットになって後続文に話題を展開している。

### 3.4 固有名詞を表わす述語名詞句のコピュラ文

「AはBだ」「AがBだ」ともに、述語名詞句が関連語句として後続文で提題表現、特に「～は」、「～が」の形式（省略表現（例文中で「(△～)」で示す）を含む）として現れやすい（21例中13例（61.9%）割合は①～⑤中最も高い）。このことは、固有名詞を表わす述語名詞句が指す対象は、後続文の話題の対象として提示されやすいことを示している。

- (16) 創業者は「日本資本主義の父」と言われる渋沢栄一だ。(△渋沢栄一は) 幕末に



幕府派遣の訪欧団に加わり、「製紙業は文明の源泉」と確信した。(△渋沢栄一は) 株式組織のもとで資金を集める必要性も訴えた。王子製紙の前身である。(編集手帳 2006. 8. 21/用例番号 33)

- (17) 複数民族の寄り合いで一つの共和国を形成してきたのがボスニア・ヘルツェゴビナである。(△ボスニア・ヘルツェゴビナは) セルビア人やクロアチア人たちが共存してきた地域で、ユーゴ内戦時には民族間の縄張り争いの草刈り場となり、とりわけ激しい戦火にさらされた。

ジーコ前監督に代わってサッカー日本代表監督に就任したイビチャ・オシム氏は 1941 年、ボスニア・ヘルツェゴビナの中心地サラエボで生まれた。(余禄 2006. 7. 23/用例番号 58)

いずれも省略表現(「渋沢栄一は」、「ボスニア・ヘルツェゴビナは」)となっているが、述語名詞句の指す対象自体が後続文の話題の対象となっている。

一方、上述以外に述語名詞句が指す対象の後続文への関わり方は多様である。述語名詞句の関連語句が後続文のヲ格、ニ・デ格、連体修飾「～の」のほか、「その～」といった指示表現、主名詞ではなく、連体修飾成分内の語句が後続文に現れる場合もある。

(18) はヲ格(連体修飾成分内)の例、(19) はニ格の例、(20) は連体修飾「～ノ」の例である。

- (18) その 2 年後、ウィーンで初めて顔を合わせたのはケネディ米大統領と老練なフルシチョフ・ソ連共産党第 1 書記である。ケネディは 44 歳の若さだった。就任後間もない青年大統領を「青二才」と見て取ったフルシチョフは相手を小ばかにする態度で接し、ケネディは内心の怒りを募らせた。(余禄 2006. 7. 18/用例番号 31)

(19) は、「あの哲人」が表現の異なる関連語句だが同一指示対象を表わす場合である。

- (19) 「憎んで最も当然なのは高利貸しである」。2 千年以上前にこう述べたのは、ギリシャのアリストテレスだ。(中略) 金融庁は少額・短期の融資について、現行の出資法の上限金利を軸に特例金利を認める考えだという。その軸となる年利は 29.2% だ。「自然に反する」かどうか、あの哲人に聞いてみたい気がする。(天声人語 2006. 8. 25/用例番号 38)

- (20) 複数民族の寄り合いで一つの共和国を形成してきたのがボスニア・ヘルツェゴビナである。(中略) ゴーコ前監督に代わってサッカー日本代表監督に就任したイ

ビチャ・オシム氏は1941年、ボスニア・ヘルツェゴビナの中心地サラエボで生まれた。(余録206. 7. 23/用例番号58)

(21) の例は、主名詞「カンナバロ」ではなく、むしろ連体修飾成分内の表現が、後続文で文脈上重要な要素として現れている例である。

(21) 最後にベルリンの空に黄金の杯を高々と掲げたのは、イタリアのカテナチオ(かんぬき)と呼ばれる守りの要となってきた主将カンナバロだ。やはりイタリアの栄光は、今大会7試合の失点をPKなどによる2点にとどめ、相手の攻撃による失点を防ぎきった堅守がもたらした。だが、そのイタリアサッカー界は堅守どころかセリエAの八百長疑惑で大揺れだ。当のカンナバロも、GKのブフォンも検察の事情聴取を受けた。(中略) イタリアには「世界一」の喜びの後に一連の疑惑への最低が待っている。(余録2006. 7. 11/用例番号32)

(21) では、主名詞「カンナバロ」が「～も」の形式で現れてはいるが、話題の中心はイタリア(チーム)の堅守、イタリア(サッカー界)である。述語名詞句「B」は、述定に転換すれば、「カンナバロは、イタリアのカテナチオと呼ばれる守りの要となってきた」となる。「イタリア」、「守り」といった語句は、ここでは「カンナバロ」の属性として主名詞に係付けられており、その意味で、主名詞そのものではないが、その属性が後続文で語られる対象となっている。

述語名詞句が様々な連体修飾成分で後続文に現れたり、名詞句の連体修飾成分の語句が現れたりする多様さは、さらに詳細な分析が必要であるとはいえ、固有名詞述語と他の述語名詞句の種類とを比較すると、明らかな傾向が読み取れる。固有名詞の述語名詞句は、提題表現「～は」「～が」の形式(省略表現を含む)で後続文に現れる傾向があり、その数は、他の格成分や「～の」、指示表現などに比べると多い。また、トキ・トコロを表わすものと数量を表わすものでは、「～は」「～が」形式で現れるものは皆無であった。さらに、述語名詞句が指す対象それ自体が後続文の関連語句で指示されるという点でも、明らかにトキ・トコロの述語名詞句及び数量を表わす述語名詞句とは、違いが見られる。

### 3.5 普通名詞述語のコピュラ文

本分析で普通名詞に分類したものは、以下のように、単一語の普通名詞から、様々な連体修飾成分を伴うものまで、すべてここに含めている。そのため、意味的に多様な名詞句が含まれている。括弧内の名詞句は実際の例である。

## I 修飾成分が義務的な普通名詞句

### A. 修飾成分＋非飽和名詞句<sup>3)</sup>

「右翼団体の構成員」

### B. 主名詞だけでは文脈上、対象が特定できない名詞句

「6日夜の自民党幹部との会食であったという小泉首相の発言」

「シャガールの4点セット」

「戦争犯罪の常設展」

### C. 修飾成分が文脈上、重要な意味を担っている名詞句

「住民の税金は住民の意思により住民のために使われる約束」

「列島沈没への政府対策の検討の中で「何もしない」という案が出る場面」

Cタイプの名詞句は、「AはBだ」にのみ出現した。「AがBだ」は比較的修飾成分を伴わない、あるいは修飾成分が短い述語名詞句であった。

## II 修飾成分が義務的でない普通名詞句

「いま疑惑の渦中にある元要人外国訪問支援室長」

このタイプは、ほとんどみられず、上例が唯一の例である。修飾成分内容が読み手に同定のための手助けをしていると考えられる。

## III 修飾成分がない普通名詞句

「消費者」、「憲法」、「野球やOL」

「AはBだ」「AがBだ」とともに、述語名詞句の関連語句が後続文で提題表現「～は」、「～が」の形式で現れやすいが、その割合は固有名詞よりは若干低かった（固有名詞述語 61.9% に対し、普通名詞 40.9%）。「AはBだ」と「AがBだ」を比較すると、「AがBだ」の関連語句の方が後続文で提題表現「～は」、「～が」の形式で現れやすく（9例中5例）、「AはBだ」（13例中4例）は述語名詞句の関連語句の後続文での現れ方と機能に多様性が見られた。

- (22) 縄文の三内丸山遺跡（青森市）のそばに、今月開館した青森県立美術館の売り物はシャガールの4点セットだ。（△シャガールの4点セットは）それぞれが縦9メートル、横15メートル。（△シャガールの4点セットは）日本公開のシャガールで最大らしい。（△シャガールの4点セットは）米国に亡命時代、バレエ団の舞台の背景画に描かれた。（編集手帳 2006. 31／用例番号 50）

(23) さらに校外でも高校生活の一端を見せつけていたのが「制服」だった。東大教授・本田由紀さんの「若者と仕事」という研究書を読んでいたら、以上のような内容の記述が出てきた。高校の制服は中卒で就職した若者には手の届かない、「憧憬の対象」だったとも本田さんは書いている。(編集手帳 2006. 8. 20/用例番号 66)

(24) の例は、従属節内に省略表現でヲ格が現れる場合である。

(24) その「雪花」をふんだんに使って日本の美を語ったのが、川端康成のノーベル文学賞受賞挨拶だった。(△川端康成のノーベル文学賞受賞挨拶を) 読み返してみると、後段になるほど難解さが増す。(天声人語 2001. 4. 1/用例番号 64)

(25) は、受身文、授受表現「～てもらう」における「～に」の例である。

(25) その機密費を実質的に仕切っていたのが、いま疑惑の渦中にある元要人外国訪問支援室長 (55) だった。(中略) が、湯水のように (△元要人外国訪問支援室長に) 使われたその金の出所は、すべて国民の税金である。事実を精査して、(△元要人外国訪問支援室長に) 責任をとってもらわねばならぬ。(天声人語 2001. 1. 23/用例番号 70)

このほか、後続文よりも先行文と関わることで文章内部のまとまりがみられる例が「AはBだ」の文にある。

(26) これほど大きな政治的影響を及ぼす行動を私事と言いつくろうことなど、そもそも政治家に許されるのだろうか。ほかならぬ日本国民とその子孫の運命を一心に担う首相である。一国の指導者の行動はそれがどんな善意や理想によるものであれ、判断を誤れば、国民、国家を危うくする。その責任をすべて潔く引き受けるのが政治家の誇りのはずだ。そこに「世界注視の私事」などあろうはずがない。依怙地も、意気地もどだい我執である。政治指導者が一瞬も目を離してはならないのは公私を問わず自らの判断や行動が引き起こす結果であり、それに伴う責任だ。政権末期だといってタンカで見物人を喜ばせている場合ではない。(余禄 2006. 8. 16/用例番号 46)

述語名詞句の「公私を問わず自らの判断や行動が引き起こす結果」は先行文に「これほど大きな政治的影響を及ぼす行動」「一国の指導者の行動」「判断を誤れば」などの関連

語句があり、「それに伴う責任」は、先行文の「その責任」と関連がある。このことから、先行文で述べきったことを、文章の最後の部分で主張としてまとめて提示しているといえよう。

#### 4. まとめ

コピュラ文「AはBだ」・「AがBだ」の文章における展開との関わりを、述語名詞句に焦点を当てて分析した。その結果をまとめると、以下のようである。

- ① 先行文で未出の情報構造をもつ述語名詞句「B」は、何らかの関連語句によって後続文に現れる傾向が強い。従って、「AはBだ」・「AがBだ」のコピュラ文の多くは、何らかの意味である要素を「提示する」機能を担っている。
- ② 述語名詞句の関連語句が後続文で現れるときの文法形式は、述語名詞句の意味範囲によってその傾向が異なる。その文法形式に相関して、コピュラ文「AはBだ」・「AがBだ」の文章における機能の在り方が異なっている。

②についてさらに詳しく述べると、意味範囲が、トキ・トコロや数量といった副詞的に機能しやすい意味であれば、後続文で「～は」「～が」や他の格成分では現れにくい。従って、対象としてとりあげられにくいといえる。そうではなく、後続文で語られる内容の場面導入として機能する場合が少なくない。

補文述語名詞句は、補文内容それ自体が話題の対象となりうる反面、事柄を表わす性質上、事柄の内容を詳しく述べるなどの仕方では後続文が語られる場合もある。

固有名詞のような個の対象を指しやすい意味、あるいは対象を様々な連体修飾成分で確定的にすることも可能な普通名詞の場合、述語名詞の指す対象や内容が「～は」「～が」を中心とする成分で後続文に現れやすい。

「AはBだ」と「AがBだ」の相違については、後続文での述語名詞句の現れ方自体には大きな違いはないものと観察される。しかし、出現する述語名詞句の意味範囲そのものが、「AがBだ」の方が限定的で、トキ・トコロや数量、補文についてはほとんど見られなかった<sup>4)</sup>。また、普通名詞の場合、「AはBだ」の方が、名詞の意味的な特徴や連体修飾成分のあり方に多様性があり、後続文における機能もそれに相関して多様である。今後、コピュラ文の連体修飾成分と文章・談話における機能との関わりについても考察する必要がある。

今後の課題として、今回分析からはずした「BがAだ」を含めた分析を行うこと、ジャンルの異なる文章からのデータでも分析を試みることで、さらに他の意味をもつコピュラ文（例えば「措定文」(佐藤 (2001) が参考になる) との比較分析を行うことも必要であると考えられる。

## 注

- 1) 熊本 (2000)、西山 (2003) では、「A が B だ」は、「提示機能」という談話機能を持ち、指定の意味構造を持たない「提示文」とされ、砂川 (2005) では、「同定文」(「指定」の意味をもつ) のうちの「全体焦点文」であるとされる。「が」の用法としては、中立叙述であるとされるのが現時点では大方の見方である (新屋 (1994)、菊地 (1997)、野田 (1996))。
- 2) 述語名詞句「B」は、先行文に未出の情報であるのがほとんどであるが、「～だけ」に関しては、既出の情報であった。これは、選択指定されうると想定される要素の集合が明らかであり、そのうちの複数なのか、単一の (限定的) 要素なのかを述べる時現れるためと考えられる。

「いやー、重かった」と6年連続200本安打を達成した大リーグ・マリナーズのイチロー選手は話している。(中略) 1世紀を超える大リーグの歴史で6年以上この記録を上回り続けたのは過去2人しかない。デビューした年から続けているのはイチロー選手だけだ。(余禄 2006. 9. 20/用例番号 27)

- 3) 非飽和名詞句とは、「「X の」というパラメータの値が定まらないかぎり、それ単独では外延 (extension) を決めることができず、意味的に従属していない名詞」(西山 (2003: 33)) をいう。
- 4) 「A は B だ」と「A が B だ」のこの種の統語的特徴のちがいについては砂川 (2005)「第5章 分裂文の構造と機能」が参考になる。

## 参考文献

- 天野みどり (1995) 「「が」による倒置指定文」『人文科学研究』88: 1-21 新潟大学
- 伊藤晃 (1999) 「日本語の二つのタイプの分裂文をめぐる」『北九州大学外国語学部紀要』96: 55-71
- 上林洋二 (1988) 「指定文と措定文 ―ハとガの一面―」『筑波大学文藝言語研究・言語篇』14: 57-74
- 菊地康人 (1997) 「「ガ」の用法の概観」『日本語文法 ―体系と方法―』ひつじ書房
- 熊本千明 (1989) 「指定と同定 ―「・・・のが・・・だ」の解釈をめぐる―」『英語学の視点』九州大学出版会
- 熊本千明 (1995) 「同定文の諸特徴」『佐賀大学教養部紀要』27: 147-164
- 熊本千明 (2000) 「指定文と提示文 ―日・英語の観察から―」『研究論文集』5-1: 81-107 佐賀大学文学教育学部

- 坂原茂 (1990) 「役割、ガ・ハ、ウナギ文」『認知科学の発展』3: 29-66
- 佐久間まゆみ他編 (1997) 『文章・談話のしくみ』おうふう
- 佐久間まゆみ・杉戸清樹・半澤幹一他著 (1990) 『ケーススタディ 文章・談話』おうふう
- 佐藤里美 (2001) 「テキストにおける名詞述語文の機能 ―小説の地の文における質・特性表現と《説明》―」『ことばの科学』10 むぎ書房
- 砂川有里子 (1995) 「日本語における分裂文の機能と語順の原理」くろしお出版
- 砂川有里子 (1996) 「日本語コンピュータ文の類型と機能 ―記述文と同定文―」上田功他編『言語探求の領域：小泉保博士古希記念論集』大学書林
- 砂川有里子 (2005) 『文法と談話の接点』くろしお出版
- 新屋映子 (1994) 「意味構造から見た平叙文分類の試み」『東京外国語大学日本語学科年報』15: 1-15
- 西山佑司 (1985) 「指定文・指定文・同定文の区別をめぐって」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』17: 135-165
- 西山佑司 (1990) 「コンピュータ文における名詞句の解釈をめぐって」『文法と意味の間：国広哲弥教授還暦退官記念論文集』くろしお出版
- 西山佑司 (2000) 「倒置指定文と有題文」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』32: 71-120
- 西山佑司 (2003) 『日本語名詞句の意味論と語用論』ひつじ書房
- 野田尚史 (1996) 『「は」と「が」』くろしお出版
- 三上章 (1953) 『現代語法序説』くろしお出版

用例 番号	出典	ハ ガ	用例文	述語 意味 範疇	冒頭 文
1	余祿	8.28-1	ハ	CD が商品化されたのは 1982 年だ。	時
2	余祿	8.27-1	ハ	会社からうれしい電話連絡が入ったのは、ゴルフコンペで優勝、表彰式に向かう途中だった。	時
3	余祿	8.25-1	ハ	「惑星定義」で揺れる国際天文学連合（IAU）が設立されたのは 80 年以上前のことだ。	時 冒頭
4	余祿	8.13-2	ハ	萩本さんが社会人野球のチームを作ろうと決意したのは 2 年前の秋だ。	時
5	余祿	7.5-5	ハ	自らのサッカーの幕引きを表明したのは、その直後だった。	時
6	余祿	7.25-1	ハ	「日本沈没」がベストセラーになり、映画化されたのは戦後 28 年を経た 1973 年だ。	時
7	編集	8.9-1	ハ	一面真っ赤に炎上する広島を憤怒の形相で不動明王が見下ろす「広島生変図」の筆をとったのは被爆から 34 年後のことである。	時
8	編集	8.20-1	ハ	詰襟の学生服姿で歌う舟木一夫さんの「高校三年生」が大ヒットしたのは、高度成長期の 1963 年のことだ。	時 冒頭
9	編集	8.1-2	ハ	いまの技術と物量をもってしても再現のむずかしい不思議な場所、闇市に全国一斉の取締りが行われたのは 1946 年（昭和 21 年）の 8 月 1 日、60 年前のきょうである。	時
10	編集	7.21-3	ハ	日付は 1988 年（昭和 63 年）4 月 28 日——最後となった 87 歳の誕生日前日である。（時）	時
11	編集	7.21-1	ハ	昭和天皇が北陸を巡幸されたのは、終戦の翌々年である。	時 冒頭
12	天声	9.4-1	ハ	モハマド・オマル・アブディンさん（28）がスーダンから日本にやって来たのは 8 年前のことだ。	時 冒頭
13	天声	8.31-1	ハ	開催都市が最終的に決まるのは 09 年だ。	時
14	天声	8.13-1	ハ	徳洲真利子さんが、東海道新幹線の車内販売のアルバイトを始めたのは、昨年 1 月だった。	時 冒頭
15	天声	7.4-3	ハ	白血病のため 66 歳で逝ったのは、1934 年の 7 月 4 日のことだった。	時
16	天声	7.4-1	ハ	ワルシャワでキュリー夫人の生家跡に行ったのは厳冬期の 2 月だった。	時 冒頭
17	余祿	8.24-2	ハ	国際数学連合が設けた第 1 回ガウス賞に輝いた伊藤清京大名誉教授が、その理論を最初に発表したのは戦時中の 1942 年、謄写版刷りの数学サークル誌でのことだった。	時／所
18	余祿	9.1-1	ハ	「五輪」の初登場は、東京でのオリンピック開催を決めた IOC（国際オリンピック委員会）総会を伝える紙面でのことだった。	所
19	編集	8.20-4	ハ	63 年に高校 3 年生だった学年の高校進学率は 62% である。	数量
20	天声	8.25-7	ハ	その軸となる金利は 29.2% だ。	数量
21	天声	8.19-1	ハ	県が、注意喚起のサイレンを鳴らす目安は 25 トンだった。	数量
22	天声	7.16-1	ハ	88 年に廃止された青函連絡船で、最後まで就航していたのは 8 隻だった。	数量
23	余祿	8.16-2	ハ	奇妙なのは、そこでお参拝を「心の問題」「人間・小泉純一郎の参拝」と私事のように話していることだ。	コト節
24	余祿	7.7-1	ハ	ちょっと違うのはその時期に雨が多いせい、二人が流す涙と雨とが結びつけられることだ。	コト節
25	余祿	7.25-3	ハ	ちょっと驚いたのは、本紙のアンケート企画「日本のスイッチ」でも「日本沈没が本当に起こったら」との問いに「海外に逃げる」という回答がわずか 27% にとどまったことだ。	コト節



			同一語句	関連語句	同一語句	関連語句	同一語句	関連語句	同一語句	関連語句	同一語句	関連語句						
主語情報構造	主語NP	述語NP	～は、 ～が	～は、 ～が	～を	～を	～に、 で	～に	～の	～の	その他	その他	指示表現	内容叙述	連体修飾成分	文末表現	その他	
関(推可)+新	補文	N														○		
新+関	補文	～ <sup>V</sup> N														○		
一般知識+新	補文	Nのこと													○			
関+新	補文	NのN										○				○		
関・一般知識	補文	～ <sup>A</sup> N															推論可能な 内容叙述	
関+新	補文	～ <sup>V</sup> N											○- から			○		
関+新	補文	～Nのこと										○						
新 (一般?)	補文	NのNのこと														○		
関+新	補文	NのN								○				○				
(関)+新	N	～ <sup>V</sup> N のN											○-三 日前					
新	補文	NのN												○		○		
新	補文	Nのこと												○		○		
関+新	補文	N																
新	補文	NN					○		○					○				
(関)+新	補文	NのN のこと															読み手世 界の日付	
新	補文	NのN										○						
関+新	補文	NのN, Nで のこと											○-後					
関+新	Nの N	～VNで のこと															連体修飾成分 内容の叙述	
新+関+新	～ <sup>V</sup> NのN	N										○						
関(指)+新	～ <sup>V</sup> N	N (○)																
関+新	～ <sup>V</sup> N	N					○											
新 (関、 一般?)	補文	N											○-う ちの					
新	補文	～ <sup>V</sup> こと		○														
(関)+新	補文	～ <sup>V</sup> こと												○				
(関)+新	補文	～ <sup>V</sup> こと																

26	余祿	7.16-1	ハ	実際、年間約2200ミリの雨が降るが、問題は、降雨のほとんどが台風と梅雨によってもたらされることだ。(※「問題なのが」とすると許容度がある。)	コト節	
27	余祿	9.20-4	ハ	デビューした年から続けているのはイチロー選手だけだ。	固	
28	余祿	8.24-1	ハ	惑星に昇格させるかどうかで天文学者の論議的となっている小惑星セレスの軌道を最初に計算したのは19世紀前半のドイツの数学者ガウスだ。	固	冒頭
29	余祿	8.22-1	ハ	その再試合で最後に栄冠を手にしたのは27回の出場経験をもつ古豪・早稲田実業だった。	固	
30	余祿	7.19-1	ハ	子どもの悲鳴をエネルギーにしてモンスターの世界に供給していたのは4年前に公開されたCGアニメの「モンスターズ・インク」だ。	固	冒頭
31	余祿	7.18-3	ハ	その2年後、ウィーンで初めて顔を合わせたのはケネディ米大統領と老練なフルシチョフ・ソ連共産党第1書記である。	固	
32	余祿	7.11-5	ハ	最後にベルリンの空に黄金の杯を掲げたのは、イタリアのカテナチオ(かんぬき)と呼ばれる守りの要となってきた主将のカナバロだ。	固	
33	編集	8.28-1	ハ	創業者は「日本資本主義の父」と言われる渋沢栄一だ。	固	
34	編集	8.26-1	ハ	ギリシャ神話で最初に世界を支配したのは天空神、ウラノスである。	固	冒頭
35	編集	8.13-1	ハ	死について考えるときに思い出すのは、詩人の青木新門さんが書いた「納棺夫日記」(文春文庫)だ。	固	
36	編集	7.17-1	ハ	北朝鮮と言う「盗みする子」を親代わりになって庇護し、その蛮行を穩便に取り繕ってきたのは中国であり、ロシアである。	固	
37	天声	8.4-2	ハ	安保理の議長声明に、イスラエル非難の言葉を入れることに最後まで抵抗したのは、米国だった。	固	
38	天声	8.25-4	ハ	(「憎んで最も当然なのは高利貸しである。」) 2千年以上前にこう述べたのは、ギリシャのアリストテレスだ。	固	
39	天声	7.9-1	ハ	先駆けとなったのは金沢市だ。	固	
40	天声	7.5-1	ハ	歌集「独り歌へる」に、「私は常に思っている、人生は旅である」と記したのは、若山牧水だった。	固	
41	天声	7.26-2	ハ	こう訴えるのは、王子製紙グループだ。	固	
42	天声	7.16-2	ハ	青森に係留されているのは、そのうちの八甲田丸だ。	固	
43	余祿	9.8-1	ハ	古代の地方行政と違って、現代の地方自治の原点は住民の税金は住民の意思により住民のために使われる約束だ。	普	
44	余祿	8.8-4	ハ	長野県民ならずとも気がかりになるのは、全国の改革派と呼ばれた知事が存在が民意を受けて先細っていく最近の地方政治だ。	普	
45	余祿	8.20-1	ハ	山形県鶴岡にある加藤紘一・自民党元幹事長の実家に放火したのは右翼団体の構成員だった。	普	冒頭
46	余祿	8.16-3	ハ	政治指導者が一瞬も目を離してはならないのは、公私を問わず自らの判断や行動が引き起こす結果であり、それにとまなう責任だ。	普	
47	余祿	8.13-3	ハ	萩本の心を動かしたのは「やめないで」という茨城の人たちのチームへの愛情だった。	普	
48	余祿	7.25-2	ハ	この作品で印象的なシーンの一つは、列島沈没への政府対策の検討の中で「何もしない」という案が出る場面だ。	普	
49	余祿	7.20-3	ハ	「だまされた」のは機器ではなく消費者である。	普	
50	編集	7.31-1	ハ	縄文の三内丸山遺跡(青森市)のそばに、今月開館した青森県立美術館の売り物はシャガールの4点セットだ。	普	
51	天声	7.8-1	ハ	やはりあの人ならと思ったのは、6日夜の自民党幹部との会食であったという小泉首相の発言だ。	普	
52	天声	7.6-1	ハ	一国の基本を定める根本法は憲法だ。	普	



53	天声	7.24-1	ハ	今年、久しぶりに訪れて目を引いたのは、戦争犯罪の常設展である。	普	
54	天声	7.22-2	ハ	気をつけたいのは、このメモの扱い方だ。	普	
55	天声	7.17-1	ハ	題材は野球やOLだった。	普	
56	余祿	7.5-2	ガ	1993年のU17(17歳以下)世界ユース選手権に出場してベスト8入りに貢献したのが16歳の時だった。	時	
57	余祿	8.5-2	ガ	同じ話で、50文どころか3貫文で里人らをやとって川底を探させたのが井原西鶴の「武家義理物語」だ。	固	
58	余祿	7.23-2	ガ	複数民族の寄り合いで一つの共和国を形成してきたのがボスニア・ヘルツェゴビナである。	固	
59	天声	2.24-1	ガ	多彩な啞壇坊の活動のうちノッキ節を継承、発展させたのが石田一松だ。	固	
60	天声	8.17-1	ガ	この「氷壁」の題材となったのが、1956年に朝日新聞に小説の連載が始まる前年の正月に前穂高岳で起きた「ナイロンザイル事件」だった。	固	
61	天声	7.20-1	ガ	国交が回復する前、反日感情の強い現地に渡った前鐘紡の野球チームを率いた総監督が、18日に95歳で亡くなった前・高野連会長の牧野直隆さんだった。	固	
62	余祿	7.22-1	ガ	グルメガイドとしても役立ったかもしれないのが料理屋の番付だ。	普	
63	編集	7.23-6	ガ	頭を抱えているのが、コンビニや外食産業などの大口需要先だ。	普	
64	天声	4.1-1	ガ	その「雪月花」をふんだんに使って日本の美を語ったのが、川端康成のノーベル賞受賞挨拶だった。	普	
65	余祿	9.20-1	ガ	イチロー選手が大リーグデビューした01年4月、「自民党をぶっ壊す」と勇ましく誕生したのが小泉政権だ。	普	
66	編集	8.20-2	ガ	さらに校外でも高校生活の一端を見せつけていたのが「制服」だった。	普	
67	天声	3.10-1	ガ	そういわれているのがC型肝炎ウイルスだ。	普	
68	天声	9.18-1	ガ	英米でよく使われるが日本ではあまり見ないのが、引用句辞典である。	普	冒頭
69	天声	9.4-3	ガ	里帰りで、もう一つ持参したのが、鈴の入ったサッカーボールだ。	普	
70	天声	1.23-1	ガ	その機密費を実質的に仕切っていたのが、いま疑惑の渦中にある元要人外国訪問支援室長だった。	普	

※固：固有名詞

※普：普通名詞

関+新	補文	NのN				○を通じて	(○)										
(関)+新	補文	NのN		○													
(関)+新	N	NやN				○?											
(関)+新	補文	NのN										○から					13年間
関+新	補文	NのN				○								○			
関+新	補文	N	(○)					○									
関+新	補文	N	(○)	○							○と						
関+新	補文	~ <sup>v</sup> N												○			
関+新	~ <sup>v</sup> N	~ <sup>v</sup> (NのN)	(○)														
新?	補文	NのN					(○)										
(関)+新	補文	NのN		○					(○)								
関+新	補文	NのN			(○)				○								
関+新	補文	N	(○)	○													
新+関	補文	N		○													
関(指)+新	補文	N	(○)	○					○								
新	補文	N	(○)			○											
関+新	補文	~ <sup>v</sup> N					○										
関+新	補文	~ <sup>v</sup> N					(○)	(○)									

※関：関連語句

※ (○) は省略表現

※新：新情報

※ (関) は省略表現の関連語句

(くりはら・さよこ 博士後期課程)